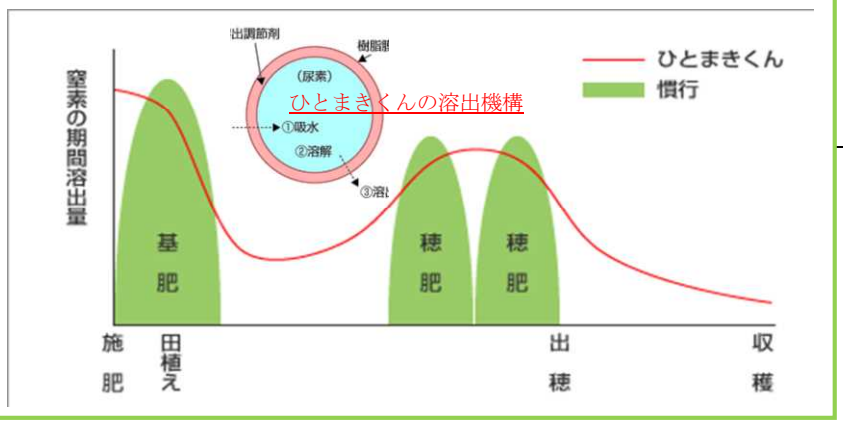
四谷の
千枚田だより
第 246 号

令和五年度 中山間地域等直接支払四谷集落協定 稲作勉強会

令和六年二月二十一日、連谷会館においてＪＡ愛知東 営農センターの高木 勤 係長を講師に「稲作における肥料と除草剤について」と題して生産活動の一環とした勉強会を十六名の参加を得て開催した。

「ひとまきくん」は、基肥に施用すると穂肥を省略することができ、米作りの省力化を可能にした肥料です。「ひとまきくん」は、

- （1）生育初期に効く窒素（速効性肥料）
- （2）穂肥の時期に効く窒素（シグモイド型の被覆肥料）
- （3）全生育期間にわたって効果の持続する窒素（リニア型の被覆肥料）を稲が必要な時期に必要な量を溶出するようブレンドしています。その２種類の被覆肥料の効果により、労力の軽減や減肥などのメリットがあり、環境にもやさしい肥料です。



【稲作における肥料】

「ひとまきくん」で使われている被覆肥料とは、厳選し均一化した尿素一粒一粒を樹脂でコーティング、二種の肥料の溶出をコントロールしたもので、リニア型の被覆肥料は、施肥直後から効果が現れ、一定期間効果が持続する。またシグモイド型の被覆肥料は施肥後すぐには効果が現れず、ちょうど穂肥の時期に効果が現れる肥料であり、代掻き前に十アールあたり二袋を目安に（約四十キロ）均一散布すればよく、慣行の体系と比較（図を参照）するとかなりの省力・効率につながる。

○効果：収量は慣行体系と比較しても同等であり、水稲作付け面積の七十％超の普及率である。

○注意点：「ひとまきくん」は紫外線に弱く、被覆が崩壊しやすいので施肥後なるべく早く代掻き、または耕起して土の中へ混ぜること。

【水稲除草剤】

水稲除草剤の効き方

水田に散布された除草剤の成分は、いったん田面水に溶けてから、数日かけてゆっくりと土壌表面に落ち着き、土壌表面に薄い除草剤の層（処理層）を作り、そこで発芽直後の雑草に吸収されて、除草効果を発揮する。その後、土壌表層の有効成分は少しずつ分解されていずれは除草効果がなくなる。

除草剤は水を介して土壌表面に処理層を作るので、その処理層がしっかりと作られるまでは水深をきちんと保つ必要があり、田面が水面に露出しないように代掻きを行い、除草剤散布時には水口・水尻をしっかり止め、散布後七日間は 落水・かけ流しを行わないようにする。流出は環境影響の回避の面からも重要なポイントなので留意すること。

除草剤の散布時期は主にノビエの葉齢で標記される。ノビエは三葉期を過ぎると防除しにくくなることから、三葉期までに防除してしまうことが大切である。

○ノビエは天候などで生育スピードが違うことから、日々の観察から適切な防除が望ましい。

○除草剤の使用基準は毎年配布している「稲作こよみ」を参照。

質疑応答

Ｑ 代掻き後一回のみの施肥で稲の秋落ちは…

Ａ 図で分かるように、二種の肥料の溶出がコントロールされている。

Ｑ 周囲の杉木立で日照不足、日陰でもできる稲はないか？

Ａ う～ん…

※#＆ 木を切るしかない、切るのが一番だ…（笑）

高木係長は今年で講師四年目でもあり、千枚田の耕作者とは意思疎通が取られており、和気藹々と楽しい勉強会になった。

暖かい冬

二月十五日から一週間は雨予想、二十一日には気温二十三℃と汗ばみ、二月に車のエアコンをかけて走ったのは初めてだ。また、二月にこんなに雨が降るのも初めてだ。毎日、うっとうしい日が続く、これじゃあ まるっきり梅雨だ。そうだ梅雨入り(入梅)とは梅の実を取る時期の長雨が語源であるが、今年は地球温暖化の影響か、梅の花の咲く今の時期に雨続きだ。これでは、梅の実の収穫の時期から梅の花の咲く時期に梅雨入りを変えなければならない時が来ないとも限らない。いずれにしても最近の気象変動はあまりにも異常だ。

近いうちに、日本の四季(春夏秋冬)が二季になるなどと、末恐ろしい妄想に駆られる。

知っとく 「菜種梅雨」＝三月下旬から四月上旬の菜の花の咲く時期に降り続く長雨。この頃の雨を「春雨」という。

古今げなげな噺

▽二月二十一日の高気温で梅の花が一気に咲いたが、蜂が飛ばなく受粉が危ぶまれる。不作でなければよいが…

▽粉雪は多少舞ったものの、道路凍結もなく、例年に比較して暖かい冬であり、野花の早咲きが目立った。

▽二月といえば、一年で一番寒い時期にも拘わらず、二十三℃と汗ばみ、記録的な暑さであった。

日	6	5	4	3	2	3/1	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	2/15
mm	6	12	0	0	0	0	16	0	0	0	8	0	18	16	9	1	96	0	0	0	14

▽昭和三十年代頃は十一月下旬から二月下旬の冬季には、ほとんど雨は降らなかったが、最近の冬は雨が降るようになった。その影響でカエルなどの生息環境(産卵期・生態系)に変化が現れた。

冬の今の時期にあまり雨が降ると田植期の水不足が心配だ。

▽トンネルが乾かないと、天気が上がらない。(トンネルが濡れているで、雨はまだ続くぞん…)

▽子供が騒ぐと雨が降る。(今は、騒ぐ子供もいない)

▽川の淵や淀みに泡がたつと雨が近い。

▽昭和三十年代頃は積雪も三十チセン、四十チセンは当たり前で七十チセンも積もったこともあったが最近では、それほど積もらなく、十時頃には溶けてしまう。また、四谷の合戸の田んぼではスケートで遊んだほど氷が張ったが、今は、昔話になってしまった。今年は霜柱もあまり見られない。

▽仏坂のツララが三月になるとカラ～ン カラ～ンと鳴り響く(氷柱が溶けて落ちる音)と、いよいよ春が来たと、野良仕事の支度をしたものだ。

▽川売に製氷場があり、氷室に氷を保存、豊橋の市民病院へ送ったげな。(明治十九年～)

▽川売の与衛門の滝の氷瀑が見事であったが、最近はあまり凍らないげな。

▽子供達が学校へ行くのに道が雪で滑ると、方瀬から根道を学校まで箒で掃いたりした。大変だったぞん。

▽ゴキブリを見たのは、嫁に来た頃だったのん(昭和四十年頃)

▽そんな頃には、熱帯夜なんて聞いたことがなかったノン。

▽去年の六月は猛暑で十一月に夏日を記録するなど、異常ずくめであった。爆発的な暑さで田んぼにカメムシもろくに飛ばなかった。

▽温暖化の影響は、悪いことばかりでもなく設楽町の名倉や津具、新城市の作手などの高冷地(標高五百～七百メートル)では美味しいコメが獲れるようになった、これも温暖化のおかげと米農家は語る。

▽渥美や平坦地のキャベツ農家は暖かい冬が災い(おかげ?)して規格外の大きなキャベツになってしまったと泣き笑いをしているそうな。

背中蓑つくり

二月六日(雨)、暖かい冬とうっとうしい雨続きで、日々動いていないと体調不良になりやすい「昭和の嫁っこ」たちは連谷区ふれあい交流館に集まり、中屋の姉さん(八十八歳)を師匠に背中蓑の作成に勤しんだ。

参加者は、昔を偲んだ藁細工の作製に干乾びた頭を久しぶりに使い、四苦八苦。それでも、楽しくてたまらん…と。また、背中蓑は今時流行りのナイロン製品と違い、酷暑対策(日よけ)には持ってこいだ…などとお互いの作品に自画自賛。

※ 古今げなげな噺は昭和の嫁っこたちが背中蓑を作りながら、昔は「ああだった、こうだった」とか楽しい(つらい)思い出噺を、それとなく聴き、纏めさせてもらったものである。

※ 表は気象庁作手測候所のデータを参考にした。

今後の予定

・四月三日(水)、横浜ゴム新城工場新人・幹部研修
午後一時半から四時まで

発行 令和六年三月十五日
文責 鞍掛山麓千枚田保存会 小山舜二